

心理検査の施行経験による施行態度や解釈の変化と検査者の個人差について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-12-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 奥田, 亮 メールアドレス: 所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4782

心理検査の施行経験による施行態度や解釈の変化と 検査者の個人差について

奥田 亮

臨床心理学専攻准教授・カウンセリングセンター相談員

要約

本研究では、心理検査の初心者が投映法施行経験を積むことによって検査の施行態度や解釈等がどのように変化するかについて、探索的に調べることを目的とした。3名の検査者が週1回のバウムテスト施行経験を7週間にわたり重ねていくプロセスを分析した結果、施行2～3回目で緊張は落ち着くが解釈や検査への不全感が生じること、3～5回目頃に検査施行（導入や手続き）と解釈が定型化されはじめ、やがて5～7回目から徐々にPDI時や解釈の中でイメージを大事に扱うようになること、が示唆された。しかし、検査施行のあり方は経験による変化よりも、当初からの検査者間の個人差のほうが顕著であり、いわば検査者のタイプとも言えるその個別性と定型化の特徴は検査導入段階にまで及んでいた。そしてそれは検査者によって必ずしも意識されていなかった。よってこれらの点について今後データ数や期間・回数を増やしてさらに検討する必要があると考察された。

キー・ワード: バウムテスト, 検査施行経験の影響, 検査施行態度と解釈の変化, 検査者のタイプ

I 問題と目的

投映法を中心とした対一の心理検査では、検査者や検査状況の特徴が被検者及びその反応・解釈に与える影響が大きいので、それらの要因に対する認識を深めておくことは重要であるといわれる（小此木・馬場, 1989; 田中, 1991）。このため、検査者や検査状況要因を実験的に統制してその影響を調べた研究が数多くある（岩脇, 1973）が、実際の心理査定場面では検査技法の特質や被検者の特徴など様々な要因も関与し相互作用を生み出すため、単一の要因の影響のみを考えることは難しい。

さらに検査者側の要因を複雑にする要素として、検査者自身の検査経験が挙げられる。既に検査の解釈に関しては、経験者と初心者の間での差違が報告されているが（山田, 1978; 青木, 1981など）、経験による差は検査時の振る舞いや検査状況をどのように作るかについても違いをもたらすであろう。しかも、実際には検査者は検査経験を積む中での各々の立場・環境・対象等にあわせて検査の進め方を徐々に修正していくものと思われる。そしてそのような施行の修正自体が、検査全体に影響を及ぼすはずである。

そこで本研究では、心理検査技法に習熟していない者が投映法を施行する経験を積む中で、検査状況をどのように形作り、検査結果の解釈や検査全般に対する態度をどのように変化させていくのか、そしてそれが被検者の反応にどう影響するのかについて、少数のサンプルを対象として量的・質的データから探索的に調べることを目的とする。

なお、本研究では査定技法としてバウムテストを用いている。その理由は以下の二点による。第一に、バウムテストに関する検査者や検査状況要因の実証的研究は散見されるのみで（津田, 1976; 藤中, 1996など）、ロールシャッハ法や知能検査などに比べてまだ十分検討されていない。第二に、バウムテストは実のなる木を描くという基本的にシンプルで教示と描画行動から構成されており、ロールシャッハやTATなどのように刺激図版・検査者・被検者・諸反応が継時的に相互作用しあう複雑な事態をさほど考慮しなくてよい、という研究上の利点があるからである。

II 方法

調査対象者 検査者3名（以下3名の略称をA, B, Cとする。女子短期大学2年生, 年齢19～20歳）。被

検査者21名（女子短期大学1年生，年齢18～20歳，平均18.8歳）

調査時期 2000年11月～2001年1月

手続き ①学生の中から検査者として調査協力者を募集し，3名（A・B・C）を選出した。②まず検査者3名に調査者が個別にバウムテストを実施した。そして後日，3名に対して同時にバウムテストの施行及び解釈法を調査者から解説した。③次に学生から調査協力者を新たに募り，集まった中から3名を被検者としてA・B・Cに各1名をあてて一対一でバウムテストを行った。検査プロセスは双方に理解を得た上でデジタルビデオカメラで撮影された。④バウムテストを施行後に検査者3名それぞれが解釈を行い，所見と感想をまとめ，毎週末にミーティングを行った。ミーティングでは，各自の取ったバウムとその所見を互いに報告し合い，討論を行った。⑤以上の③と④の手順を7週にわたって繰り返した。被検者は③で募った学生の中から毎回異なる学生が選ばれた。

Ⅲ 結果と考察

1. 各検査者の7回の検査施行・解釈に関する諸指標のデータ

まず3名の検査者による7回の検査施行と解釈に関するデータを表1に示す。

表1において，7回の施行を通じて3名の検査者に共通する指標の変化の傾向（施行を重ねるにつれて数値が増減したり一定の値に収束したりする等）が見られるかについては，検査場面に関しては導入から描画段階までで，マニュアル注視回数が3名とも3回目頃には安定しだすように見えるが，それ以外の指標では特に3名共通の変化傾向は見当たらなかった。PDIでは3～4回目頃に被検者に尋ねる質問点が，検査者ごとに大体定まってくるのが見てとれる。解釈に関しては，経験を重ねるにつれPDI（特に被検者の述べたバウムイメージ）を考慮してバウムの特徴を考へることが増えるようである。一方，施行を重ねればバウムを見る視点が多様になり着目点が増えるのではないかと考えられたが，AやCの7回目を除いて全体としては施行後半で着目点が増えるとは言い難い結果となった。

このように幾つかの点で同じように変化する側面が

あるように思われたが，全体として各指標データは検査者間の個人差の方が大きく，その違いはむしろ初回からかなりはっきりと現れていた。もちろんサンプルが3例のみであることから，上記の共通傾向を妥当なものとして主張することは難しい。そこで次に，3名の検査者の7回にわたる検査施行の内容について事例的に詳しくとり上げ，検討を加えることにする。

2. 各検査者の7回の検査施行の内容

1) 検査者A

#1: 導入でAは自己紹介を忘れる。かなり緊張が高く，調査の説明や教示に何度も詰まる。被検者は「バウムテストを経験したことがある」と言いながら，あっさり描画を始める（図2.1）。PDIでもAは「えっとー，えっとー」と何を質問してよいかわからず混乱している。<A

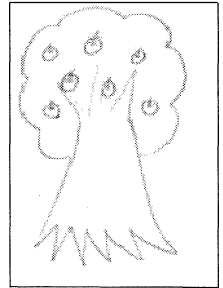


図2.1 A#1のバウム

の感想>「緊張して頭の中が真っ白になった。描画を待つ間はドキドキしたし，PDIはマニュアルを見ないとできなかった。」#2: 手順通りに検査を進めるAだが，始めからマニュアルを繰り返し注視するため，被検者もマニュアルを気にしている。PDIでは被検者がバウムのイメージを語り，それが広がるとAも描画を見るが，質問に詰まるとマニュアルを手取る。<Aの感想>「自分も被検者もリラックスできた。でもPDIではやはり頭の中が真っ白で，マニュアルに沿って聞いた。」#3: (この回予定の被検者が来ず，直前に他の被検者に依頼した。) Aはやはり頻りにマニュアルを見る。教示時や描画用具を渡す際にも見ている。被検者は描画もPDIの返答も淡白で防衛的な態度を示し，対話が展開し

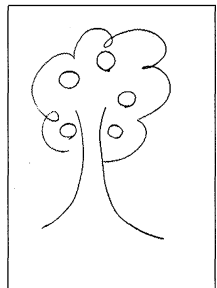


図2.2 A#3のバウム

図2.2) Aが，マニュアルを凝視したまま20秒ほど沈黙する場面も見られた。<Aの感想>「施行は前回より慣れたが，相手がテストに全く興味がないのか，PDIの話が続かず困った。」#4: 依然Aはマニュアルを繰り返し見

表1 各検査者の7回の検査施行・解釈に関する諸指標の結果

検査者	回	施行場面						解釈																																			
		導入 *1		描画		FDI		解釈時の着目点 *2																																			
		総所要時間(秒)	アイコンタクト(時間)	マニュアル注視(回)	時間(秒)	時間(秒)	マニュアル注視(回)	質問点 *3	全体印象	サイズ・形状	筆圧	幹太さ	幹先端	樹冠と幹の比率	幹の他の形	樹冠包線	枝	葉	実	根	空間象徴	その他	着目点合計 *4																				
A	1	500	90	*	*	55	284	*	場所・状況/大きさ/季節/種類/Q/樹齢/実の数/実の成熟/将来/add														P	P	7[2]																		
	2	723	98	18.77	12	120	384	12	全体的特徴/場所・状況/将来/Q/実(種類, 数)/add														P	O	4[1]																		
	3	315	61	11.10	12	17	176	9	状況・場所/他の木の存在/全体的特徴/大きさ/実の数/将来/季節/add															O	8[0]																		
	4	468	38	7.77	9	64	298	11	場所・状況/大きさ/季節/実の種類/将来/実(毎年生るか, 将来)/add															P	O	7[2]																	
	5	671	65	11.45	10	116	431	12	大きさ/状況/将来(毎年生るか, 生る時期, 数)/Q/根/add															P	O	7[2]																	
	6	490	83	15.80	11	35	305	10	全体的特徴/大きさ/状況/実(種類, 毎年生るか)/季節/将来/根/add/Q/実の意味/add															P	O	5[1]																	
	7	441	57	8.27	9	107	216	10	大きさ/Q/季節/実(種類, 毎年生るか, 食べる者がいるか)/将来/状況・他の木の存在/add															P	O	O	P	10[4]															
平均/合計 *6		515.4	70.3	12.19	10.5	73.4	299.1	10.7																	2	5[4]	1	5	6	6	3	2[1]	4	1	0	6[5]	4	1	2	2[2]	48[12]		
B	1	245	48	9.93	6	14	133	7	全体的特徴/場所・状況/実(食べられるか)/他に似た木はあるか/樹齢/add/Q/季節/Q															P	P	7[3]																	
	2	463	26	1.11	2	191	172	1	全体的特徴/場所/太さ/大きさ/実(将来種類)/Q/葉(数, 色)/add/季節																	P	10[3]																
	3	*	*	*	*	*	*	*2	(前半部不明)/実(種類, 数, 食べられるか, 生る時期)/季節/Q/add																P	7[2]																	
	4	313	13	1.14	1	78	170	1	場所/他に似た木はあるか/大きさ/太さ/葉/季節/実(種類, 食べられるか, 数)/季節/Q/目立つか/add																P	P	O	O	10[2]														
	5	410	32	0.00	2	110	204	4	場所/同じような木はあるか/大きさ/目立つか/特徴/枝/根/実(種類, 生る季節)/季節/Q/add/実を食べるか																	P	O	O	9[2]														
	6	266	29	0.56	1	32	157	0	場所/大きさ/目立つか/葉(色)/枝/幹(太さ)/将来/実(種類, 熟す季節, 色, 数, 食べるか)/add																	P	P	O	O	P	11[5]												
	7	308	23	0.35	0	38	202	0	場所/同じような木はあるか/目立つか/大きさ/幹(太さ)/目立つか/枝/根/幹(太さ)/葉/実(種類, 食べるか, 大きさ, 数, 色)/add																		P	P	P	P	8[5]												
平均/合計		334.2	28.5	2.18	2.0	77.2	173.0	2.2																		2	7[4]	5	6[2]	6	4	1	2	4	4[1]	5[5]	7[7]	4[1]	2	3[2]	62[22]		
C	1	665	94	13.45	3	62	417	0	Q/色/葉/状況/実/場所/周囲の風景/Q/大きさ/幹/実の味/add/他の生物の存在/add																		OP	5[3]															
	2	882	111	20.00	7	82	485	0	場所/状況/幹と葉の色/実(色, 味, 成熟度, 生る時期)/季節/時間帯/状況/根/樹齢/add/枝先/add																		OP	O	6[1]														
	3	742	97	21.78	1	126	443	0	Q/場所/大きさ/状況/幹と葉の色/実(色, 生る時期)/季節/天気/実の味/他の生物の存在/Q/幹先端/add/Q/状況/実の数/add																		OP	O	8[2]														
	4	736	69	11.95	2	84	529	0	場所/状況, 他の木の存在/葉と幹の色/樹齢/葉の形/季節/実(誰か食べるか, 数, 味)/add/大きさ/状況/天気/Q/枝/add																			OP	OP	P	P	O	9[4]										
	5	846	118	23.45	0	119	508	0	Q/場所/他の木の存在, 状況/幹の色/大きさ/葉の色/季節/実(成熟度, 大きさ, 硬さ, 生る時期, 味)/他の生物の存在/根/実の味/樹齢/枝先/add																				OP	P	O	O	P	P	O	7[4]							
	6	673	87	9.01	2	68	453	0	場所/状況/実(誰か食べるか)/場所, 他の木の存在, 状況/大きさ/幹の色/根/季節/天気/時間帯/実の生る時期/枝/葉/実の成熟/add/木の太さ																				O	O	OP	O	P	O	O	7[2]							
	7	594	93	14.55	2	35	408	0	場所/大きさ/太さ/樹齢/将来/幹(色, 硬さ)/根/枝(先)/葉(形, 色)/実(大きさ, 誰か食べるか, 生る時期, 数)/状況/季節, 時間帯/天気/add																				P	O	O	O	O	O	OP	P	P	OP	P	11[6]			
平均/合計		734.0	95.6	16.31	2.4	82.3	463.3	0.0																			3	3[2]	2	6[1]	4[1]	2	2[1]	0	6	4	2[3]	3[3]	7[7]	6[3]	2	3[2]	53[22]

*1 被検者が入室してから教示が行われる直前までを導入とする。指標のうち「アイコンタクト」は検査者が被検者とアイコンタクトをとった時間。「マニュアル注視」は検査者がマニュアルを見た回数を示す。*2 検査者が所見における解釈の報告で触れていた描画の特徴(O)およびPDIの内容(P)。これらの着目点は調査開始時の調査者からの解説で示されていたが、各解釈でどこに着目するかは検査者に委ねられていた。*3 PDIで検査者が被検者に尋ねた内容。記された順に質問がなされていた。Qはその描画独自の特徴について、addは「他に(描画に関して言うこと)は何かありますか?」という付加質問。*4 []はPDIの内容への着目数の合計。*5 Aの#1では機器の誤作動で音声のみ録音された。*6 諸指標のうち、総所要時間~マニュアル注視までは7回の平均値を、解釈時の着目点については着目回数の合計を、各検査者ごとに算出した。*7 Bの#3は実験者の操作ミスによりPDI途中まで画像記録がされなかった。

る。ただしPDIで話が広がる時は見ない。逆に不安な場面では、必要ない状況でもマニュアルを手を取る。被検者は入室から何度も咳をして、Aにあまり視線を合わせない。<Aの感想>「今までで一番リラックスできた。PDIではマニュアル通りでなく、自分なりの言葉で聞けた。でも聞くポイントは同じ。」#5: これまで同様、Aはマニュアルと被検者を交互に見て、自己紹介、導入の説明、教示を進行させる。被検者は描画中、「緊張しますよねー」「全てがこれなんか、研究材料なんかかなー」等と独白。PDIで被検者がイメージ豊かに語ると、Aは描

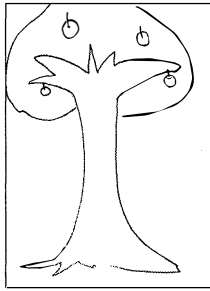


図 2.3 A#5 のバウム

画を中心に話を進め、笑いあう場面がよく見られた(図2.3)。<Aの感想>「すごく慣れてきた。被検者が気さくでリラックスできた。会話が弾み、質問もどンドンできた。」#6: (この回はAが大幅に遅刻し、被検者がかなり待ってから開始された。) Aは前回よりマニュアルを見ることが増加。被検者は描画中「恥ずかしいですね」とコメントし照れたように笑うと、検査者もそれに合わせてよく笑う。<Aの感想>「今回もリラックスできスムーズに進められた。でもまだPDIでマニュアル通りの質問をしてしまう。自分の言葉で質問すると「誘導尋問」になる。もっと自然にしたい。」#7: マニュアルを折々に見るのは変わらない。被検者は描画には没頭し、PDIでバウムのイメージを豊かに語る。検査後に「全然緊張しなかった。こういうの好きなんです」と被検者がコメント。ただPDIはそれほど展開しなかった。<Aの感想>「いつも通りできた。PDIはマニュアル通りにはなるが、例を挙げたり自分の印象を伝えたりすることで、被検者の想像を膨らませられるようにはなった。」

検査者Aの特徴: Aは2回目以降、検査経験を重ねるに伴い、施行に慣れリラックスできるようになったことを報告している。これらは当然といえば当然のことであるが、それでも初回から一貫してAの「マニュアル依存」は変わらなかった。Aの検査の施行は決められた手順通りであり、初回に自己紹介を忘れた以外は、ほとんどマニュアルから逸脱する事はなかった。この

Aの態度に対する被検者らの反応は、総じて防衛的であるように見受けられた。特に、急に調査を依頼された#3の被検者にはその傾向が顕著で、描画もPDIも極度に反応が淡泊であった。しかし自らの検査態度と被検者の反応との関連性をA自身は必ずしも意識しておらず、例えば#4で、PDI時にAがマニュアルに注視している姿を被検者が目の当たりにした後に、バウムのイメージが曖昧にしか語られなくなったのにもかかわらず、Aは検査後に「非常にリラックスできた」と語っている。#5でも、被検者が「検査されている」気分を幾度か表明しているのだが、A自身はむしろ被検者のオープンな態度から「会話が弾んでリラックスできた」と述べている。最終的にAはマニュアルから脱することはできなかったが、#7では被検者のイメージを拡げることによって、それまでとは少し異なる施行態度へと変わりつつあったように見受けられた。

2) 検査者B

#1: 検査導入時Bは入室した被検者が着席しないうちから自己紹介を始める。その後手順通りに検査を進めるが、被検者は検査に対し「こんなんと思ってなかった」と戸惑う。描画は14秒で終了(図2.4)。PDIではBがマニュアルを見て質問する場面が見られた。<

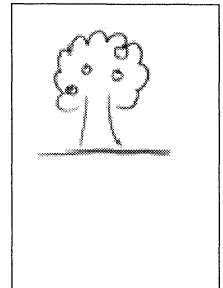


図 2.4 B#1 のバウム

Bの感想>「被検者よりも緊張した。(PDIで)何を聞いていいか分からなかった。」#2: Bはやはり被検者の着席前に自己紹介をして席を立ち、描画用具を取りにいく。導入で調査の説明をせず、自分が席に戻る前にテストの教示を始める。<Bの感想>「1回目と全然雰囲気違った。自分も相手も緊張をあまりしなかった。」#3: (この回は記録機器の誤作動で、PDIの途中まで録画されていなかった。) PDIでは依然Bがマニュアルを見るシーンが見受けられた。被検者のコメントが少なく、やりとりが展開しない。<Bの感想>「被検者が緊張して悩みながら描いているので、リラックスしてもらおうとしたけれど、今いち緊張は解けなかった。だからバウムにその人らしさが本当に出ているのか疑問。」#4: 自己紹介と調査の説明をせず、

被検者が着席するとすぐ予め用意していた描画用具を渡して「今から絵を描いてもらいたいです」と教示を始める（入室から教示まで13秒）。またこの回より導入で「緊張してますか?」と必ず相手に問い、被検者が大抵「はい」と答えるのに対し一言「大丈夫ですから」と返すのが慣習化する。<Bの感想>「（検査の施行は）別に普通な感じだった。」#5: 今回も自己紹介や調査の説明をせず。相手が入室し着席する前に、描画用具を取りに自ら席を立つ。そして席に戻るとすぐ描画用具を渡し、教示を始める。以上の導入スタイルが今回で

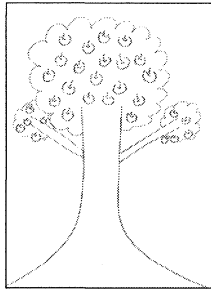


図 2.5 B#5 のバウム

ほぼ確立される。この回は被検者が導入に戸惑い「ええっ、絵を（描くの）?」と問い返すが、Bは意に介さず「そう。じゃ、いいですか? 実のなる木を…」と教示を行う。描画中に被検者は盛んに喋り、PDIでは検査者を見ないが、描画を注視して木のイメージを多く物語る。（図2.5）。<Bの感想>「今までと雰囲気全然違い、普段の会話みたいで、面白かった。木について被検者が自分から沢山話してくれて、その木や情景が浮かんだ。解釈も今までで一番しやすく、PDIでバウムのイメージを掴む重要さにやっと気づいた。」#6: 前回と同じ導入スタイル。進行はスムーズになりPDIでマニュアルを見ることは少なくなった。目前のバウムのイメージを広げるといふより、決まったポイント（木の大きさ、太さなど）を質問する傾向が出てきた。<Bの感想>「前はすごくやり易かったが、今回はやり易くもやりにくくもなかった。前までと同じ、普通。」#7: 同じ

導入。今回の被検者はPDIでバウムのイメージをBと対話する感じで積極的に話す。笑いあう場面も多い。バウムのイメージは最初「あまり目立たない」木だったが、だんだん変化して最後には「とにかく

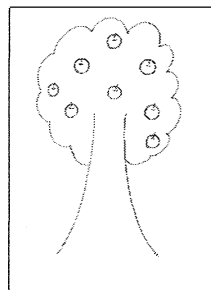


図 2.6 B#7 のバウム

<Bの感想>「すごくやり易かった。やっぱりPDIで会

話が成り立つのと、一言しか返ってこないのでは、やり易さが全然違う。解釈もやりやすい。」

検査者Bの特徴: 初回の検査施行では被検者が検査状況に戸惑い、描画がすぐに終わっている。初めての施行ゆえにBの緊張は強く、それが被検者に影響したのであろう。#3では、そのような緊張状態で行われた検査の信頼性への疑問を表明している。しかしBは回を重ねるごとに、導入に時間をかけず速やかに検査を施行し、被検者との相互作用を極力排するという様式を確立して安定していった。#2からは調査の説明を、#4からは自己紹介さえ省略するようになった。他にも被検者が着席しないうちから用具の準備に席を立つ等、被検者と対面することで強い緊張が生じるのを回避する方策を一貫して採っていたと思われる。同時にこの様式は、検査場面から検査者の直接的な影響を無くすことになり（Bが自己紹介をしなくなったのは象徴的である）、検査刺激（教示等）のみが前面に出るといふ場面が形作られることとなった。これは一見、検査者要因というある種不安定な要素を排除する検査施行法であるようにも思われる。ところがこの導入は、検査者-被検者間のラポール形成の機会を欠き、間接的に被検者の不安を高めかねないという特質をもたらす。検査導入時に被検者に対して検査に関する説明や確認をしっかり行うことは、被検者の警戒を解き信頼関係を築くために重要（馬場, 1974）だからである。ただしBの事例を見ると、Bの導入に対して描画やPDIで豊かな反応を見せた被検者もいた。彼女らは概して場面や対人状況への不安が低いように見受けられ、それらの回ではBは「やり易かった」と感想を述べている。また施行経験後半では、そのような豊かな反応に接することでバウムのイメージが鮮やかになり解釈が容易になることをBは述懐している。

3) 検査者C

#1: 入室した被検者にCは自己紹介（この時被検者の名前も確認する。これは2回目以降もほぼ毎回行われた）と導入の説明を行った後、描画用具を準備しながら、被検者が先程まで受けていた授業の話題について会話を交わす。その後、教示に入る。被検者が描いた描画は、樹木の全体像ではなく樹冠の一部と空で

あり、Cは初回からイレギュラーなバウムを目にして驚く(図2.7)。<Cの感想>「まさか、そういう描き方をすると!という驚きと不安があった。緊張したが、被検者が一番緊張すると思い、はじめに大学の授業の話をした。」

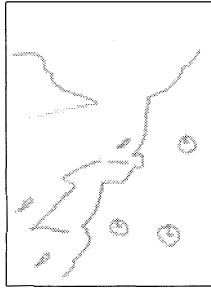


図 2.7 C#1 のバウム

#2: 直前まで受けていた授業が長引き、被検者との待ち合わせに少し遅れたCは、自己紹介・導入の説明の後、遅刻を謝しながらそれを元に対話する。教示が行われると、被検者が“以前授業などでバウムテストを受け、解釈も少し聞いた経験がある”と告白したためCは動揺する。被検者はPDIの質問に初めはやや抵抗が見受けられる。しかしPDI後半になるとイメージが活発に報告され、検査終了後もCに話しかけていた。<Cの感想>「バウムテストの経験や解釈の知識があるというので、偽って描画したりPDIの質問で解釈を悟ったりするのは、と心配した。」#3: これまで同様、教示前にCは被検者と会話を試みるが、あまり展開せず。被検者は描画後に「絵はあまり得意でない」と発言。PDIはCがイニシアティブを取ってイメージを拡げる。<Cの感想>「施行に特に困ることはなかった。今回は解釈に悩んだ。じっくりこなかった。」#4: (この回は予定されていた被検者がキャンセル、急遽別の被検者に依頼して行われた。)Cは導入の説明を一部省略して実施(被検者との対話は行う)。はじめ不安そうな被検者であったが、PDI時は描画を注視して質問にしばし沈思したの

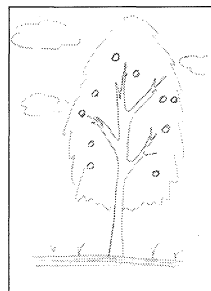


図 2.8 C#4 のバウム

ち少し意表をつくようなイメージを語る(図2.8)。Cも調子を合わせ、二人で言葉を重ねて笑いあう場面も見られた。<Cの感想>「やりやすかった。前回のミーティング後に色々考え、被検者の外見によるイメージを意識しないようにした。被検者は自分と似た雰囲気の人の方がやりやすい。」#5: 導入はこれまでと同じ。描画前に被検者は「下手でもいいですか」と発言し、

描画後も「(絵は)大嫌い」と言う。しかしPDIでバウムのイメージはよく表現する。<Cの感想>「PDIで質問の間に空かないように努力した。間が空くと、緊張や警戒感が高まり、自分もパニックになるので。」#6: 導入で被検者が受けた授業の試験の話題になり、Cはその授業の受講経験について語る。

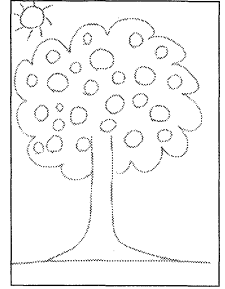


図 2.9 C#6 のバウム

PDIでは互いにジェスチャーを交えて話しあう(図2.9)。退室前に、これまでなら多少被検者と対話するCだが、今回はそっけない。<Cの感想>「今回の被検者に対して、何故か

“鋭いもの”を感じて、奥底で“ビビっている”自分を感じて戸惑った。理由は分からない。それは表に出さないように努めて、対話は順調に進んだが、その気持ちが影響を与える気がした。また、PDIではいつも同じ順で決まった質問をするが、今回は何故か実が気になって、そこから話を聞いた。」#7: 導入では地元の話で対話が展開する。被検者は発言が積極的で、PDIではバウムのイメージをすらすらと鮮明に語る。<Cの感想>「今までの反省(PDIで質問の間を空けないこと、描画で描かれていない部分、例えば根などについてもイメージを聞くこと)を踏まえて施行して、今回が一番上手くできた。達成感がある。」

検査者Cの特徴: Cの検査施行経験のプロセスを辿ると、まず#3で解釈への不全感を感じている。これは、被検者の外見的印象にバウムの解釈が引きずられてしまうことに起因していたようである。しかし#4からバウム自体のイメージを重視することで、この不全感を解消している。さらに#6では、定型化していたPDIの質問パターンから離れて、描画に添ってイメージを引き出す動きが生じていた。このような描画の見方に対する変化があった一方で、初回から最後まで変わらずCの特徴として目立っていたのは、被検者とのラポール形成に対する意識の高さである。導入時に被検者の名前を確認し、用具の準備時間を利用して被検者に話題をふって、30秒ほど必ず対話を試みている。他の検査者より導入時間が長い(表1)のはこのためであった。このように場面を作っていくことは、C自

身の緊張緩和と同時に被検者の不安低減や信頼感の形成にもつながったであろう。その効果は、例えば#4で急にバウムテストを受けることを依頼され当初不安が高い様子であった被検者が、描画段階やPDIにおいては検査者にごく協力的な態度を示したところなどに見られる。それは検査への不安を検査者と協調的な関係を作ることで払拭しようという被検者の試みであったかもしれないが、その結果得られたバウムやそのイメージに関する情報は豊かで、同様の事態下で施行された検査者Aの#3の結果とは大きく異なっている。その他の回でも多くの被検者がPDIでのCに対する語りや自己開示に積極的であった。ラポールへの意識は、被検者と自らの関係性への感じやすさでもあり、検査経験の後半で、検査場面において被検者との関係性がリアルに生起していることへの気づきを報告しているのも、このためであろう（#4「自分と似た人のほうがやりやすい」、#6「(被検者に) 鋭いものを感じてビビっている自分がいた」等）。

3. 総合的考察

表1と3人の検査者の検査施行内容の分析より示唆された、経験を重ねることによる検査者の変化プロセスは次のようにまとめられるであろう。まず検査初心者としての緊張は2~3回の施行で落ち着くが、逆に施行や解釈、あるいは検査自体への不全感が感じられるようになる。しかし3~5回目頃には検査施行において一定のパターン化が生じ始め、導入や手続きが安定すると、自分なりのスタイルに手応えを感じ、6・7回目頃にはPDIと解釈において被検者のバウムイメージを大事にするようになる。すなわち経験による変化は、検査施行手続きや解釈の独自のスタイル確立による安定と、被検者の表出するイメージの扱い方に現れていたと言え、これらが初心者から経験者へとなりゆくプロセス上でのポイントであると考えられる。

しかし検査施行のあり方は、共通する変化よりも検査者間の差異の方が初回から大きかった。これは検査者のタイプとでも呼べるようなもので、特にBとCの対照的な検査態度の相違が目をつけた。両者は小此木ら(1989)が指摘した検査者に見られる態度の両極、すなわち“無刺激の非人格的存在となるよう努力すべき”という態度と“より豊富な反応を得るために

あらゆる働きかけを試みるべきである”という態度にそれぞれよく合致している。小此木らは、前者の態度は被検者の心理状態や動機づけが不適切になるために通常なら得られるはずの反応が阻害されたり生産性が低下したりする危険性を、後者の場合には検査刺激(図版や課題)以上に検査者と被検者の関係が反応に影響してしまう危険性を挙げている。確かにBの得たバウムは比較的特徴に乏しく(図2.4~2.6)、PDI時間も短い。一方Cが検査で得たバウムは個性的なものが多く(図2.7~2.9)、PDIは長くイメージ豊かに語られたが、それらはCとの関係によって引き出された部分が多いと考えられる。

ところで検査者3名の相違は、単に検査者としての態度のみならず、検査技法の手続き以前の検査場面への導入を含めたより基本的な検査状況の作り方・構造化の相違でもあった。それらは先述のように施行3~5回目ではほぼ定型化され確立されるが、そのような型(検査状況)を作り出していることに本人は必ずしも自覚的でなかった。おそらく実際の臨床現場においても、教示前の導入場面にさえ自らの個性が強く現れ検査状況を形作っていることに気付いている検査者はそう多くないのではないだろうか。従来、投映法において検査者の影響が強調されてきたが、今後は検査者の特徴が具体的に反映され、被検者の反応にも影響を与えると考えられる「入室(あるいは出会い)から検査課題教示に至るまで」の場面やそこでの検査者の振る舞い等について、さらに検討する必要があると考えられる。

IV 今後の課題

本研究は検査者の検査施行経験が検査施行の諸側面に与える影響を探索的に調べることを狙いとしてサンプル数を少数にとどめたため、諸指標の分析において統計的処理は行えなかった。また、7回という施行回数は検査熟達プロセスの中ではまだ初期の段階と言える。本論文の考察が妥当なものであるか確かめるためには、より多くのデータからより長い期間の検査熟達プロセスとその影響について調査していくことが必要であろう。また、各々の検査状況が被検者に主観的にどう感じられていたのか等、被検者の

体験に関するデータを採取していれば、より検査者の態度や検査状況の影響に関する理解が深まったと考えられる。この点についても、今後の研究課題としてい。

文献

- 青木健次 (1981) : 全体的印象からバウムテストを診る
心理測定ジャーナル, 17(8), 2-7.
- 馬場禮子 (1974) : 人格査定—診断論(I) 佐治守夫・水島恵一(編) 臨床心理学の基礎知識 有斐閣 pp104.
- 藤中隆久 (1996) : バウムテストにおける人間関係の効果の実証的研究 心理臨床学研究, 14(2), 163-172.
- 岩脇三良 (1973) : 心理検査における反応の心理 日本文化科学社
- 小此木啓吾・馬場禮子 (1989) : 新版精神力動論 金子書房 pp42-70.
- 田中富士夫 (1991) : 心理アセスメントの基礎理論 安香宏・田中富士夫・福島章(編) 臨床心理学大系 第5巻 人格の理解① 金子書房 pp1-31.
- 津田浩一 (1976) : バウムテストの教示効果について心理測定ジャーナル, 12(3), 5-10.
- 山田麻有美 (1978) : バウムテストに関する研究—印象評定を基にして— 心理測定ジャーナル, 14(12), 3-6.